

# エンジヨイ・ベースボール

環境情報学部 准教授 加藤貴昭 かとうたかあき

本稿の執筆依頼を受けた後しばらくして恩師である前田祐吉元野球部監督の訃報が届いた。まさに青天の霹靂へきれきと言わなければならない出来事で、何か熱いものが身体の深いところからこみ上げてくるのを感じた。

初めて前田元監督を見たのは、たしか中学生の頃にNHKで放送されていた早慶戦だった。アナウンサーが語る「エンジヨイ・ベースボール」という言葉と、ナイスプレーを喜ぶ監督のとびきりの笑顔に、慶應で野球をやりたいという夢が芽生えた。高校生の夏に参加した学習会(当時行われていた、慶應を目指す高校生が野球の練習と試験勉強をする合宿)で、「浪人してもいいから絶対に慶應に入ってこいよ」と声を掛けていただいた。念願の大学入学が叶い、大吉のグラウンドで聞いた「バッターならホームランを狙え」という教えに、監督の豪快さが凝縮されていた。しかし私たちが1年生のときに勇退されることとなり、結局、監督の指揮の下、神宮でプレーする夢は叶わなかった。それでも最後の教え子の一人になったことは幸せである。

前田元監督の著書である『野球と私(青蛙房、2010年)』には「エンジヨイ・ベースボール」について、「この言葉は単にワイワイと楽しむというのではなく、①チームの全員がベストを尽くす。②仲間への気配りを忘れない。これはチームワークと言い換えてもよい。③自ら工夫し、自発的に努力する。という三つの条件を満たして、はじめて本当に野球を楽しむことができるし、楽しんでこそ上達するのだという考え方である」と書かれている。また、学生が勉強することの権利を強く主張され、部員全員を卒業させたことが誇りであると述べられていた。これがまさに慶應の野球と言えよう。晩年、私が学位を取得した際には「お前は野球じゃあまり打てなかったが、勉強ではよく頑張ったな」とあの屈託のない最高の笑顔で喜んでいただいた。監督がいなければ今の私は存在しない。一生忘れることのない大切な言葉を胸に、監督の教えを未来の学生に伝えていくことが恩返しになると信じて。エンジヨイ・ベースボールを、永遠に。

(写真提供:ベースボール・マガジン社)



前田祐吉元野球部監督

談話室

教員によるエッセイコーナー